

## 『源氏物語』「桐壺」巻頭の言説分析・再説

—語り手の感情の主観的表出と敬語の使用—

東原伸明

## 1 違和感のある冒頭の言説

いづれの御時おほんときにか、女御にようご、更衣かぎいあまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより「我は」と思ひあがりたまへる御方々かたがた、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈げらふの更衣たちは、ましてやすからず。朝夕あさゆふの宮仕みやつかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあはれなるものに思おもはして、人の譏そしりをもえ憚はばからせたまはず、世の例ためしにもなりぬべき御もてなしなり。

(小学館新編日本古典文学全集 1-17頁)

## はじめに

冒頭から私事で恐縮であるが、二〇〇〇年の今夏学術団体物語研究会の大会で拙著『物語文学史の論理—語り・言説・引用』新典社刊の合評会が催された(1)。半日という長時間を費やし、徳江純子(2)、原豊二のリポーター、三谷邦明のコメントイーターという布陣で所収論文十本全部に対しての辛口の批判と位置付けがなされたのだった。そしてそれは望外にありがたいことであつたのだが、それらにもまして会場の一般会員からの批判は辛辣で、特に宗雪修三からのものは胃が痛くなる程強烈であつた。当日のコンディションが十分でなかつたこともあり、宗雪が納得する回答が出来なかつたのはまことに遺憾なことである。所収論文十本すべてを批判してくれた宗雪に申し訳ない気持があるので、この紙面を借りて些か回答を試みたいと思う。ここではその批判のごく一部、まさに十分の一に答えることしかできないのだが、「桐壺」巻頭の再度の言説分析によつて、その回答とし、並びに諸説の紹介と整理をしておきたいと思う。

宗雪修三の批判は、恐らく宗雪の現在のポスト、国立大学教育学部の古典文学の教員という立場とかなり密接に関わりのあるところから、こだわりとして発せられたものではないかと推察される。それというのも私が分析した「桐壺」巻頭部を批判する宗雪は、「いとやむごとなき際にはあらぬが」の「が」を、私が「主格」ではなく「同格」の「が」と捉えているのは怪しからんという発言から始まったのだが、これは言い掛かりというものである。たぶん宗雪の思い込みによる思い違いではないだろうか。宗雪があまり自信たつぷりに意見するので不安になり、その場では保留にし、大会から戻ってから私は拙論を皿のようにして読み直してみるのだが、どこを眺めてみても、そうであるとも、そうでないとも述べた箇所を見つけないのでない。同格「など」という記述は発見できないし、そもそもそんな解釈をした覚えもない。はっきりしたことは、どうやら私は主格論者ではあつても、同格論者ではない……らしいということだ。あるいは宗雪の念頭には、たとえば藤井貞和が以下のように述べているような

理由・問題意識というようものが、同様にあつたのだろうか。

第一文は、たいへん有名な文で、だれもが暗記しているほどであるにせよ、同時にこれは、何度よんでもなにかひつかかりを感じます。「あらぬが」「ときめき給ふ有りけり」、なにかこうなだらかに流れない、ここで堰き止められるような、ややぎこちない感じがする一文です。この作者、物語作家に、もう一度このところを書き直してほしいと頼みたくなるような、読むほうが苛立たしい思いをさせられる。すなわち「いとやむごとなき際にはあらぬ」、たいして重んじられる身分ではないということ、寵愛をうける、「ときめき給ふ」ということは、どうやらぶつかる二つのことのようなのです。／＼これがなだらかに、つまり身分が高いから寵愛されるということであるなら、こんな文にはならないと思うのです。身分が高くないということと寵愛を受けるということ、どうにも相成り立ちそうにない二つのことが、同時にこの桐壺更衣の場合に成り立っている。そういう二つのことが同時に存在する、それを一つの文で書きあらわそうとすると、こういうなだらかに流れにくい文になるのではないか。つまり同在しにくい二つのことがらを一文であらわそうという。物語作家は最初に文を書きあらわすときに、その苦心からはじめたのですね。(∴)／＼ですから、世の中によくおこなわれております現代語訳で、「あらぬが」の「が」は同格であるから、「なににないで」と置き換えてしまうやり方は、私のとらないところです。私はそれはいやだなと思いません。それは印欧語の文脈を知るものが応用して考えた便法にすぎません。何しろ便法に従うことから墮落がはじまります。「で」ではなく、「が」でいきたくないと考えます。だから、先ほど読みました現代語訳が、ごっこつしてなだらかでないのは、そのまま本文を活かしたきこちなさです。「いとやむごと

なき際にはあらぬが」の「が」は、そういう方がおられたという主格をあらわす「が」というふうにとつて、そのままにしておきます(3)。

藤井のこの指摘には、まさに目から鱗が落とされた新鮮な感じがするのだが、しかし同時に、藤井の鋭角な指摘はまた、現代語訳をしたからこそ炙り出された違和感ではないのか。《ごっこつしてなだらかでない》のは、現代語訳だからこそであり、《そのまま本文を活かした》ために結果論的にきこちなさなくなつてしまつたにすぎないのではないのかという印象が、私の中では拭い切れないのである。よくよく熟慮してみなければ、藤井の意見には俄かに賛同できない気持があるのである。原点の、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」じたいがそうだとは、今はちよつと思えない。このことは翻訳などと同様に異文化理解・文化較差の問題として改めて考え直してみる必要があるのではないだろうか。むろん小稿にはそれを論じているゆとりがないので、稿を改め考えてみたいと思う。

## 2 待遇表現「すぐれて時めきたまふありけり」

ところで高等学校の古典の教科書で、『源氏物語』『桐壺』巻が載せられていないものが果たして存在するものかどうか、その方面に暗いのでよくわからないのだが、ふたむかしほど前、非常勤の中学・高等学校の教員として初めて教壇に立っていた頃の私は、古典文学を材料にした敬語Ⅱ待遇表現を教える授業というものに対して、とても懐疑的であつた。その懐疑というのは、そもそも『源氏物語』『桐壺』巻頭の言説に発するのであつた。

それは、「すぐれて時めきたまふありけり」の「ありけり」にある。当時持た

されていた指導資料には、次のようであった。

すぐれて時めきたまふありけり 格別に帝のご寵愛の深い御方がいた。

「時めきたまふ」の下は「事」の略とみる説もあるが、「人」とみたい。「おはしけり」と敬語表現で待遇していないのがやや気にかかるが、この程度の人には敬語を用いないこともある（松尾氏全釈）<sup>(4)</sup>

《この程度の人には敬語を用いないこともある》というのならば、いったいどの程度の人にはコンスタンスに用いられるのだろうか？ 私は教壇に上がる以前に考え込んでしまった。《用いないこともある》などという曖昧な説明で果たして生徒は納得してくれるだろうか？ と言っても、受験を技術と記憶と割り切っていた当時の生徒からはそんな本質的な質問が発せられる筈もなかったから、どうにか私は辛うじて糊口を凌いできたのだが、一步踏み込んで、「では、どの程度の人には絶対的に付くのですか？」という本質的な質問が発せられていたら、恐らく一巻の終わりであつたに違いない。しかし、指導資料にしてこの体たらくなのだから、この質問に対して相手が納得するように答えられる教師は皆無ではないのか、と居直つていたのも事実である。なんとも情けない教師であつた。

その私が言説分析という視座に出合つたことにより、まさに眼から鱗が落ちる思いがしたのは、事の自然である。そして同時にその成果が、この度宗雪修三の批判の対象となつたわけである。それは旧稿の、次項に掲出する箇所すべてであつた<sup>(5)</sup>。

### 3 批判対象となつた言説の分析

物語文学は、口承のモノガタリ（語り）の形式を内在化して、語るような体

裁を装つて書かれた文学であり、語り手と聞き手相互の対話・談話としてある。

「いまは昔……」等の冒頭句に呼応するかたちで物語文学一般の冒頭の言説を統括する「けり」という助動詞については、竹岡正夫の《現実の作者・読者のいる現場からかけ離れた「あなたなる」架空の世界、つまり物語の世界》の事象を表出する機能を説く説がもつともよ局的を射ている<sup>(6)</sup>。この「けり」の機能により、読者は現実の時空から物語の虚構の時空へと誘われてゆく。

よく知られている細江逸記の《伝承回想》説が「けり」の時制を指摘したものならば<sup>(7)</sup>、竹岡の説はその相を鋭く説いたものである。そして「けり」の相という点では、「き」を過去の時制を示す助動詞の始原と規定し、「き(来) + 「あり」「けり」と考え、《過去からの継続》《過去からの》伝来の助動詞とする藤井貞和の説も<sup>(8)</sup>、学説的にはむしろ、春日政治などを代表とする継続説の系譜に位置づけられるべき始原論であり<sup>(9)</sup>、物語文学への適合性という点ではもつと評価されてよいだろう。

源氏物語も「いづれの御時にか、……けり」という「けり」の機能によつて読者は虚構の時空と同化することができるのであるが、物語文学一般との際立つた差異は、この冒頭の言説、地の文の中に既に「語り手」が素顔を露呈させてしまつていふという点にある。桐壺更衣の出自を「やむごとなき際にはあらぬ」とする判断は絶対的なものではないし、彼女の存在を「おはしけり」とはせず「ありけり」と無敬語で待遇するのも、ここを語る者の目の高さからなされた、きわめて主観的で相対的な独自の認知なのである。

金岡孝<sup>(10)</sup>や三谷邦明<sup>(11)</sup>などによつて既に指摘されているように、地の文における敬語の使用は「語り」の対象のみならず、「語り」の場の状況や語り手自身の位相をも表出してしまふ機能を逆説的に有しており、したがつて《桐壺巻

のへ語り手へは、内裏の様子を俯瞰することが出来る、かつ、女御には敬語を用いても更衣には使用しなくてよい「典侍」のような人物」<sup>12</sup>が主観的な判断で語っていると認識できるのである。「典侍」という人格と肉體性を有する実体的な語り手を設定することによって、「桐壺」巻はへ語りへの視点の神のような全知性が制限され、等身大の視野と立場を確保することができたのである。

また源氏物語は、場面や事件、あるいは巻ごとに位相の異なる複数の語り手を設定することを方法化しており、たとえば帚木三帖では淑景舎の曹司に仕える女房や左大臣邸の女房、空蟬や夕顔との一件を見聞した女房たちのように、あまり身分の高くない語り手を設定し、その限られた視野と情報から主観的かつ相対的に語らせているのであり、「帚木」冒頭と「夕顔」巻末の呼応した長文の草子地などはその典型だといえるのである。

#### 4 語り手の感情の主観的表出としての敬語

さて宗雪修三の批判は、たしかに「ありけり」のところは一見無敬語に見えるけれども、その直前の部分に「たまふ」という敬語が付されているから桐壺更衣は「たまふありけり」と「たまふ」という敬語で待遇される人物であって、東原の論は事実を誤認しているという趣旨のものでなかったか、たしかそのように記憶している。

しかし、そうした宗雪の認識はまた、前後のコンテキストと、この個所に関する研究史を無視した理解だと言わざるをえないだろう。なぜならば、「御方々」には「おとしめそねみたまふ」と「たまふ」が用いられているが、「同じほど、それより下臈げらふの更衣たちは、ましてやすからず」とあって「たまふ」は用いられ

ておらず、明らかに無敬語の待遇であるからである。法則性を言うのならばこちらの方が原則なのであって、むしろ「すぐれて時めきたまふ」の「たまふ」の方は、原則から外れているのである。だが、この外れているところにこそ『源氏物語』における敬語のデリケートな用いられ方、相対性、語り手の感情の主観的表出性というものが伺えるのではないだろうか。この「たまふ」という待遇は、桐壺更衣という個人的な立場ではなく、帝の後妃という立場一般に対してのものではないかと私は思う。敬語の専門家ではないのであまりたしかなことは言えないのだが……。

たとえば、国語学ではなく、あくまでも文学研究という立場から『源氏物語』に用いられている敬語の有様を捉え直そうという努力をした玉上琢弥の次のような指摘は、当該箇所を考察する上でひとつの有益な指針となるだろう<sup>13</sup>。

一、「源氏物語」において、敬語には高低の幾段階があり、地の文で一定の段階をたもつのは最高の帝・后・東宮・上皇のみである。

二、地の文で、最低にもせよ敬語の付きうるのは、皇族と上達部の列以上であり、特別の君達これに準じ、女性もほぼ同じい（……）。僧侶については現在のところ多くの疑問を残して、今後に待ちたい（……）。

三、身分差ある人々を一括して叙するときは、敬語はその高き従う。

四、特に高貴なる人々と一座するとき、敬語は簡略になりまた全然省略されることがある。

五、文勢を図るため、その他特殊な効果を求めて、敬語が省略されることがある。

「桐壺」巻のほぼ当該個所について玉上は、《最高段階（この場合帝）は、最高敬語が用いられるほか、敬語のつき得る箇所は一つも漏れることがない。次は

(女御と上位の更衣) 句末ごとにつく。最低(この場合桐壺更衣)は、その人について叙述の最後に「つだけ申し訳のように敬語がつくのである」と説いている。

高橋亨も、《ここでは、主体の明示されない帝に「せ給ふ」という最高敬語が付くが、女御などの「御かたがた」と区別して、更衣には付かない。これは、玉上の第四項「特に高貴なる人々と一座するとき、敬語は簡略になりまた全然省略されることがある」にあてはまる》と玉上説を追認している(14)。

桐壺更衣への「たまふ」という待遇が玉上の説くように《申し訳》程度でしかないのは、敬語が身分の上下関係を指示するとともに、語り手の対象に対する感情、すなわち語り手の気分の問題を計算に入れなければならないということを感じているのではないだろうか。

卑近な例で恐縮であるが、近年、如何わしいカルト教団の信者たちが毒ガスを散布するという忌まわしい事件があった。あの事件は、敬語・待遇表現を考えるうえで、我々に啓示を与えてくれた。少なくとも私はひとつ学習したような気がする。それはかの教団の広報担当の不敵な人物に対して、当時マスコミのリポーター、インタビュアーがどんな態度を取ったかを想起されたい。彼らは事件の加害者・犯罪者とおぼしき団体の代表に対して「:おっしゃる」「:していらつしやる」などという常識を逸した敬語、過度の待遇をもつたのであった。ことから推し量れば、敬語というのは、身分の上下や親疎のみならず、未知の恐怖の対象などにも用いられる、多分に語り手の気持・気分を反映した、きわめて主観的なものであるということをよくよく認識しないわけにはゆかないということである。

したがって桐壺更衣に「たまふ」という敬語が《申し訳》程度しか付かないのも、端的に言って語り手が彼女を「たまふ」という存在としては、待遇したくない

という気持の反映と考えざるをえないだろう。恣意的ではないものの、かなり主観的ではある。帝の後妃だから、しかたなくという態で「たまふ」と待遇しているにすぎないのだ。

桐壺更衣は、「御方々」からは「めざましきものにおとしめそね」まれる存在であり、帝からも「あかずあはれなるもの」と思われていた。藤井貞和は、《卑下のために使われる「もの」を他人に使いますと、軽蔑したような言い方になります。『めざましき物』、ここは桐壺更衣をまわりの身分の高い女性たちが軽蔑するところですから、「もの」という言葉が使われます。その三行後にも桐壺帝が桐壺更衣に対してやはり「もの」といつている。(…)帝は桐壺更衣を寵愛している、しかしこの段階では、かならずしも対等の男と女といったかたちではなくて、やはり「可愛いやつだ!」という感じで寵愛している。「物」とありますので、帝が桐壺更衣を軽く扱っているというか、見下している感じがこめられた言い方になっているということでしょうか。(…)このようにして、後宮社会にあって桐壺更衣は人びとから見られつ、なにか必死に宮仕えしているという、そういう状態が語られています》という(15)。ここを語る語り手も桐壺更衣に対しては、必ずしも好意的ではないと理解すべきであろう。否、好意的ではないどころか、むしろ嫉妬と嫌悪の感情を抱いていたと考えた方がいいかもしれない。そのことはたとえば、語り手である彼女が桐壺更衣の母親の出自を、

母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、:(18頁)  
と、「ゆゑ(故)」ではなく「よし(由)」を用いて語っているところなどに伺えるのではないだろうか。今手許にある『岩波古語辞典』の「よし」の項目には、

《平安女流文学で、「ゆゑ」と区別して》「二流以下の血統。また、その人人の風情・趣向・教養・人品。

として、当該箇所を用例に挙げている。新編日本古典文学全集の頭注四もこれを踏襲しており、したがって明らかに語り手は桐壺更衣の血筋を貶める「語り」を行っているのだといえるだろう。

そんな二流の血統の奴がなぜこれほどまでに寵愛されねばならぬのか、気に食わない、納得いかないという宮中の大方の雰囲気を反映しないしは、代弁しているのが、ここを語る語り手の立場なのであり、その「語り」が桐壺更衣とほぼ同じくらいの出自・家柄・身分の人物によって語られているのだと考えれば、「桐壺」巻頭の状況はすつきりと理解ができるのではないか。

このように言説分析は従来の、作家紫式部の創作意図の反映などという素朴な幻想を払拭し、書かれてしまったことによりたしかにそこに存在する『源氏物語』のテキストと言説そのものに即した本質的な分析をなしうる有効な視座のひとつだといえよう。今後ますます実践試行されることが望まれるものである。

- (1) 長野県諏訪郡原村八ヶ岳自然文化園会議室、二〇〇〇年八月二二日  
(火) 午前。

- (2) 当日、徳江純子は大会に出席参加できなかったため、徳江の作成したペーパーを三浦則子が代読してくれた。

- (3) 藤井貞和「語り手、時制、物語のはじまり」『源氏物語(古典講読シリーズ)』岩波セミナーブックス』岩波一九九三年。

- (4) 東原伸明「研究史 源氏物語の「語り」と「言説」」『物語文学史の論理 語り・言説・引用』新典社二〇〇〇年、初出一九九四年。

- (5) 山本健吉ほか編「玉のをのこ御子(桐壺)」『高等学校 新選源氏物語(古典) 指導資料』尚学図書一九八三年。

- (6) 竹岡正夫「助動詞「けり」の本義と機能」『言語と文芸』第31号一九六三年一月。

- (7) 細江逸記『動詞時制の研究』泰文堂一九三三年。

- (8) 藤井貞和「フルコトの文体」、『万葉集』の伝承関係歌』『物語文学成立史』東京大学出版会一九八七年。および、「けり」に詠嘆の意味はあるか』『物語の方法』桜楓社一九九二年。

- (9) 鈴木泰「き」と「けり」の違いについての学説史』『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』ひつじ書房一九九二年は、研究史を俯瞰するうえで有益であるが、藤井貞和の説を「これは「けり」を伝承回想だととらえる立場である」(二六九頁)と位置づけているのは、まったく解せない。なお、春日政治『西大寺本金光最勝王経古点の国語学的研究』勉誠社一九六九年復刊(一九四二年初出)は、「けりはキアリであって、「来」を形式動詞とする時は、動作の過去より継続して今に存在することを表すのであって、「前カラス(アリ)続ケテ今ニアル」の義である。時からいへば動作の初を過去に想定するけれども、今に存在するから現在でなくてはならない」としている。

- (10) 金岡孝「源氏物語の表現主体」『文章についての国語学的研究』明治書院一九八九年(初出一九六二年)。

- (11) 三谷邦明「源氏物語における「語り」の構造」『物語文学の方法I』有精堂一九八九年(初出一九七二年一月)。

- (12) 三谷邦明「源氏物語第三部の方法」『物語文学の方法II』有精堂一九八九年(初出一九八二年八月)。

(13) 玉上琢弥「敬語の文学的考察―源氏物語の本性(その二)―」『源氏物語研究―源氏物語評釈別巻一』角川書店一九六六年。

(14) 高橋亨「源氏物語の待遇表現―その心的遠近法―」増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編『源氏物語研究集成第三巻 源氏物語の表現と文体上』風間書房一九九八年。ただし、へ語り手を実体的には確定せず、透明で中立な立場のものへのけのような存在と捉える高橋は、《それがなぜかが問題となるが、のちの場面では更衣にも敬語が付くように、その場面ごとの「焦点化」の度合い、どの作中人物の視点に語りのまなざし(カメラ・ワーク)を置くかということに関係している》と述べているように、小稿とは自ずと立場を異にしている。高橋の考え方に賛同できない理由は、へ語りへのへ騙り性ともいえるべき語り手の偏向した姿勢が捨象されてしまうように私には思われるからである。

(15) 注(3)の藤井の書。